

# 令和5年度 読書教育重点校 活動報告



## 熊本県立南稜高等学校

### \*学校紹介\*

「球磨の地に 人材の泉を 掘る」の建学の精神のもと、創立121年を迎えた伝統校です。

生徒数342名（男子161名 女子181名）4学科13クラス

普通科／総合農業科／食品科学科／生活経営科

広い農場や温室、水田があり、牛・馬をはじめ、鶏・ヤギ・ウサギなどの小動物も飼育されています。

農業鑑定・田植祭・収穫感謝祭など、農業関係高校ならではの独自の行事もあります。

### \*図書館紹介\*

学習センター棟1階にあり2階の3年生のクラスに近い場所です。

蔵書数 約2万冊

席数 学習用36席他にベンチなど

生徒一人当の貸出数 9冊

### \*図書館年間利用状況\*

教科活動・・・約90時間 その他利用・・・約60時間

主な授業利用は、課題研究・卒業論文・読書感想文、調べ学習（歴史・小動物・献立・介護レクリエーションなど）。

学科ごとに専門書を利用する。入口側に朝読書用・教養・一般書、奥に専門性の高い本を配置。ふだんは気軽に入りやすいよう工夫している。

### \*図書委員会活動\*

4月 おすすめ本の展示と紹介  
（7月発行の広報紙掲載）新しく赴任された先生にインタビュー

5月 「まんが選挙」準備  
（購入まんがを投票で決める）

6月～ 七夕

7月～ 「まんが選挙」

9月 購入まんがの決定

10月～ 南稜祭準備と参加  
R6年度購入雑誌選挙

12月～ 読書レクリエーションや図書館整理

※毎月、雑誌付録のポスターの抽選や、しおりづくりをしています。

### \*朝読書の時間\*

今年度から日課（月水木の週3日）に、全校一斉読書（朝読書）が導入されました。

デジタル世代の高校生は、映画館に足を運んだり、テレビ・雑誌など限られたメディアからの情報を娯楽にしている割合の減少や、SNS、YouTube、インターネットなど自分の興味のあるメディアに時間を費やすことで、趣味趣向も多様になっています。

一人一人の読みたい本が違うようになり、コロナ前と同じように売れ筋の本を準備しても手に取ってくれる生徒はほとんどいません。各自準備した自分の好きな本で朝読書を楽しんでいる生徒も多いようです。おこづかいで1,000円を超える本を買うことの難しさはあっても、図書館には、個人では買わないような、世界を知る本、自分を知る本があることを様々な角度から、読書活動で図書を使ってもらえるよう、生徒教員を支援していきたいと思います。

## \*令和5年度 読書教育重点校としての取組\*

一般的な読書推進（「〇冊読んだ人にプレゼント!」「特製しおりキャンペーン」「おすすめ本 POP」など）には、実は本が好きな人により読書をしてもらうというような立ち位置（効果）があります。

単純に読書が好きか嫌いかの二択で、嫌い（好きではない）の方の生徒は約半分です。その理由のトップ3は、3位は、時間的な忙しさ、部活、他に YouTube・ゲームなどの好きなことがある。2位は、興味のない本を読まされて、それが続いてなんとなく嫌い。1位は、中学高校で、なんで本を読むことがいいことなのか教わらなかった、でした。

読みたくない本を読まされたのであれば、自分の好きな本（好きなこと）の向こう側にホームがあることを知ってもらえばいいのではないかと考えました。そこで、重点校としてテーマにしたことは、「読まない生徒の視点に立った読書活動の推進」です。従来の読書推進活動を否定しているつもりはなく、本を読まない人たちを、今後どうやって読むことに向かわせるかということは、非常に大事だと考えたからです。

図書委員会で、親しみやすいまんがを入れ替えることにしました。古く劣化したものを、要望が多かったまんが作品に入れ替えることができました。管理面が難しいため、まんがコーナーは貸出禁止としましたが、その代わり次年度も柔軟に増やしていき、魅力あるコーナーになっていけばと図書委員を中心に選書を考えています。

新着図書コーナーには、有名 YouTuber の本や SNS から書籍化された本を入れています。あれこれ迷わず気軽に小説にトライできるよう、小説紹介クリエイターけんご氏が TikTok で紹介した小説や YOASOBI などの楽曲とのコラボレーション小説を図書委員が考えて選書しています。

来館した生徒が飽きないよう、小コーナーの設置を増やしつつ、「なんで本を読むことがいいことなのか」この命題に、今後、デジタル世代への読書のあり方として、「量より質の読書」を推奨し、応えていきたいと思えます。

今後、親しみやすさを「まんが」で、そして小説を中心とした読書のための図書館ではない、調べ学習（自分の身になるもの、知識を身につけることを、本を通じて）のための専門書の充実に、力を入れていきたいと思えます。

